

# 大学と専門学校の 「W」で日夜勉強 中央大学駅前校の 3校の実態ルポ

「Wスクール」。在学しながら資格取得のための専門学校に通うことを、こう呼ぶ。

数年来の少子化を反映した就職戦線の「売り手市場」の波を受けて、資格を取得しようとする学生は減る傾向にあり、

「業界は、冬の時代」（専門学校関係者）ともいわれる。

果たしてその実態は、そしてWスクールの道を選んだ学生たちの姿は――

中央大学駅前校で日夜勉強に勤しむ学生たちのWスクールをルポした。

司法試験をはじめ、公認会計士、税理士、公務員など難関資格試験の合格者数で全国上位にいる中央大学。在学生の資格に対する意識は高い。「中央大学・明星大学」のモノレール駅から徒歩5分もしないところに、資格取得のための専門学校が3校ある。晩秋の一日、「早稲田（W）セミナー」、伊藤塾、「資格の大原」をそれぞれ訪ねた。

## 早稲田セミナー

強みは公務員試験

在校生の9割が中大生

Wセミナー中大駅前校は1998年10月開校。

尾関雅俊校長は「公務員試験に強みを持ってます」という。在校生の9割を中大生が占める。その他、帝京大学、首都大学東京、政法大学、国士館大学などの学生が在籍している。

厚労省のインターンシップも参加

小林瑞穂さん（法学部3年）は、行政研究会の友人から、グループ申し込み（割引制度）の誘いを受け、今年5月に入学した。公務員志望で「国Ⅱ地方上級」を目指す。

「2年生の秋から、公務員を志望していた」と



ビデオで学習するWセミナー



小林瑞穂さん

いう小林さん。いまは週3日の大学授業の合間に、Wセミナーのビデオ、ライ

ブ授業を受講している。  
小林さんは、専門科目を勉強していく中で、新しい発見があったという。「大学の講義では学説やその対立などまで勉強するけれど、公務員試



濱谷祐輔さん

濱谷祐輔さん（文学部3年）の二人も、そうだった。二人は、



福村亮馬さん

クチコミから入校する人が多い。ともに地方公務員志望の福村亮馬さん（文学部3年）と、

験にはそこまでは必要とされない。その違いが分かってきました」。  
今年9月には、厚生労働省のインターンシップに参加した。「雇用安定行政、男女の雇用機会均等などに興味があつて、厚生労働省を選びました。思っていた以上に若い方々が多くて親しみやすかったです」。  
わずか5日間だったが、この経験で志望する気持ちがまた少し強くなったという。

### 自習室と大学図書館を併用



尾関Wセミナー校長

福村さんと濱谷さんは毎日、Wセミナーの自習室に通い、閉室する夜8時まで

で勉強、その後は大学図書館に席を移して勉強している。

濱谷さんは、大学では自らが中心となって野球サークル「フレンジャーズ」を発足させ、週一回試合や練習にも参加。「野球をするときには勉強のことは考えない」と充実した学生生活を送っている。

福村さんは、コンビニで朝6時から9時まで、週3回のアルバイトをしている。「バイトをきっかけに、人と話すのが好きだと分かった。ノルマを決めてサービスをする民間ではなくて、公益性

大学の入学式の前に行われるウェルカムパーティーの仲。今年3月に濱谷さんがWセミナーに入校するのを知って、4月に福村さんが入ることを決めた。  
「法学部、商学部が多いのと比べると、文学部からWスクールの道を選ぶ人は少数派ですが、合格されている方は多数います」（尾関校長）という。

を重視する公務員を選びました」という。

## 資格を意識、中央大学に編入

公認会計士を志望する梶野祐輔さん（商学部3年）は、農工工学部生命工学科から中央大学に編入したという一風変わった経歴を持つ。Wセミナーには2年生の中頃から、簿記検定2級を受験する目的で通い始めた。



梶野祐輔さん

2年生

のはじめに『道路の権力』（猪瀬直樹著）を読んだのがきっかけで、公認会計士に興味を抱いたという。「それまでは生命工学科で学んだ専門知識をどのように将来に生かすかが描けずに、悩んでいた」そう、勇気を出して他大学編入を決めた。

「暗記中心のテクニカルな学習方法ではなくて、大学で商学・会計学を学びたいと思って中央大学に入りました。編入だから、ゼミの選択肢が少なかったり、単位の振り替えで、通常半期20単位のところ、28単位あったりということはあるけれど、授業には満足しています」

大学には週5日、Wセミナーにはビデオ講座に  
通う毎日だ。

「監査人となって、公的機関のお金の流れを知りたい。行政に入ることでノウハウを活かしたい  
と思っています」と目標は明確だ。

（学生記者 池内真由II法学部3年）

## 伊藤塾

### 強みは法科大学院、司法試験 人気のライブクラス

法科大学院、司法試験に強みをもつ伊藤塾の中央大学駅前校は、1998年秋に開校された。法科大学院、司法試験を目指して受講する生徒は約150人で、司法書士、行政書士、公務員を含めると200人ほどになる。やはり9割ほどが中大生だ。

生徒たち



高野・伊藤塾校長

は、毎週火曜、金曜の18時30分から始まるライブクラスに多く集ま

るほか、授業のあいまには講義のDVDをブースで聞くというスタイルで勉強している。

高野祐治校長は「法科大学院、司法試験を目指す学生の多くは、法律家、法曹への目的が明確であり、出席率もいい」と語る。

法曹を目指す学生に関しては「今年は特に、1年生から通い始める学生が多い。年々スタートが早くなって、まじめになってきているという印象を受けます。大学進学が決まってから、高校3年のときに相談に来る学生の方もいますから」と高



自習室で勉強する伊藤塾塾生

野校長はいう。

## モチベーションの維持が大事

葛城繁さん（法学部1年）は、司法試験とロースクールを目指すために今春から通っている。「初めは、大学だけで、と思っていました。でも、研究室は自習室的要素が強いし…。もともと、司法試験を目指すために法学部に入ったから、法律だったら伊藤塾だと思っただし、他よりカリキュラムがしっかりしていたので、選びました」と語る。

「司法試験を目指すのって長丁場だから、モチベーションの維持が大事なんです。1年生でしっかりしたモチベーションを持っている人が伊藤塾には多いですね」大学の授業とのやりくりはどうしているのだろう。

「基本的には講義には出ています。法科大学院にも学校の成績が関わってきますし…。でも、べつに一日中勉強してるってわけじゃないですよ。バランスが大事ですね。この生活に慣れてくれば、特にきつくないです」

受講料はどうしているのか、と聞くと、「親が出してくれています。その分、親から

の大きいプレッシャーがあるから、勉強しなきゃいけないと思いますよ」との答えが返ってきた。

## 仲間がいるから頑張れる

丸山英明さん（法学部1年）は、弁護士志望で、



仲良しの左から丸山英明さん、葛城繁さん、川成渉さん

司法試験とロースクールを目指す今年春から通っている。「伊藤塾は、ビデオだけじゃなくて、ライブ授業があるから通っています」という。受講料は「親に出してもらっています。親にも悪いし、そのお金が勉強に駆りたてますね」と、葛城さんと同じ受けとめ方だ。

大学の授業には「基本的には出てます。サークルも入ってます。サークルにも時間があえば出たい」と語る。そんななかで、丸山さんは「仲間が大事。一人じゃもたないですよ」と強調する。

そんな仲間の一人である今枝隼人さん（法学部2年）は、法科大学院を目指し、2年生の春から通っている。サークルで労働関係の勉強をしているうちに、今問題となっている派遣に興味をもち、弁護士になって関わってあげたらと思ったという。「1年のときは学校の勉強だけしていました。」

伊藤塾は、高校の先輩の話を聞いて選びました。授業は出ていますね。今のところ両立しています」と語る。

## 食事と風呂…、あとは勉強

「やるだけやってみて、だめだったらその時はその時で」と答えてくれたのは法科大学院を目指す大畑碧さん（法学部3年）。

3年生ということもあって、「ご飯を食べて、

お風呂に入って、という以外はほとんど全部勉強です」という。ただ、映画を観ることで息抜きはしっかりとしている。

父親の薦めで伊藤塾を選んだという大畑さんは、2年生の春から通いだした。テレビドラマでかつこいと思つて法学部を受験したものの、1年生のときはまだ法曹にすむかどうか決めかねていたのだ。

「最初は弁護士志望だったんですけど、今では検察官を目指しています」という大畑さんは、今は週に4〜5日伊藤塾に通っている。「私は実家暮らしなんですけど、家族の支えがあつてやれていますね」。

(学生記者 武田朋美 法学部2年)

## 資格の大原

### 強みは公認会計士、税理士 売り手市場の影響も

大原は「簿記」で知られる通り公認会計士、税理士が強み。中大駅前校は2001年春に開校、現在、受講生は約200人。堀野陽一事務局長は「7講座ありますが、公認会計士がざっと50%、税理士が20%を占めています」と説明してくれた。



堀野・大原事務局長

就職氷河期から、売り手市場に入つて受講生に変化があるか、伺つたところ、堀野さんは「少なからず影響が出ていますが、長い将来を見据えて資格取得に励む方も多くなります」という。

### 受講料は貯金と親の援助で

戸田貴裕さん(経済学部4年)は公認会計士志望。1、2年生のころから経理研究所で資格取得にむけて勉強していた戸田さんが、大原に通うようになったのは3年生から。「経理研のペースが決して早いわけではなかったが、自分に合っていないと感じ、大原に切り替えた」という。大原の受講料は自分の貯金と親からの援助でまかなっている。1日12時間、週の半分以上を大原で過ごしている。4年生で残り取得単位もゼロのため大学にいく必要もない。「毎日勉強をしていれば、息詰まることも当然ある。むしろ、しよっちゅうだ」という。公認会計士の試験は年1回で、合格者もほんの一握りのため、「プレッシャーも大きい」が、会

計士を目指す友人がたくさんいるのでがんばれる。なぜ公認会計士を目指すのか?と聞くと、「誇れる仕事がしたいから。出身地の秋田県の田舎には会計士が一人もいないので、自分が会計士なる」と戸田さん。

### 専門校は“家”みたい

村里侑紀さん(商学部2年)も公認会計士を志望している。大量の教科書を両手で抱えた村里さんに、記者はびっくり。「これで1科目です」に二度驚いた。



村里侑紀さん

今年3月 から大原に通い始めた村里さん。周囲がみんな経理研で勉強してい

る姿に刺激をうけ、1年生の冬に公認会計士を目指すことを決めた。

「大原に来るようになってから、生活スタイルは大きく変わりました」という。静岡県出身で、大原から近い所で一人暮らし。ほぼ毎日大原で過ごし、資格取得に向けた勉強に励んでいる。「費用は親に払ってもらっているので、絶対



大原の視聴覚室で

にフェードアウトはできない。大原に来るようになって友達もたくさんできた。スタッフやチューターとも仲が良いのでメンタルな部分もしっかりサポートしてもらっています」

朝、昼、晩と、三食を大原でとることも珍しくない。そんな大原は「『家』みたいです」と村屋さん。

### 「好きなことやれ」と両親

2年生の11月から大原に通い始めた福原朝峰さん（経済学部4年）は、1年生の時、友人に誘われるようにして経理研を取り始めたのがきっかけで資格取得に目覚めた。経理研では簿記三級・二級コースをとって二級までは取得したが、簿記一級の試験で落ちたときに大原に入ることを決意した。

公認会計士になるための勉強を始めて2年目。



福原朝峰さん

「勉強が大変でも、できるだけ楽しんでやるように意識している。新しい知識

が増えていくことも楽しいと感じるようになった」というが、1年目は勉強自体に慣れるのが大変で、なかなか余裕はうまれなかった。

出身地の沖縄県では公認会計士を目指す人も、施設も、講師も少ないので、なかなか資格を取るのには難しい、という。「中大は都心から離れてい

るので誘惑も少ないし、施設も講師もそろっている。勉強する環境に恵まれている」と福原さん。受講料を全額払ってくれている両親は、「自分の好きなことやれ」と言って、応援をしてくれるそうだ。「就活はゼロ。迷うことが面倒くさい」と公認会計士を目指して一直線だ。

（学生記者 宮下沙希Ⅱ文学部2年）